20171106 円山動物園検討部会議事録

○開催の挨拶

○委員長および職務代理者の選出

事務局より吉中委員を推薦。

－全員賛成－

吉中委員長より委員長職務代理者として福井委員を推薦。

－全員賛成－

○議事内容

吉中氏　運営要項第5条により、本会の議事について委員のみなさんから確認をいただくことが必要となっています。みなさんご了承いただけますでしょうか。

－全員了承－

事務局
(高橋係長)

－資料1説明－

資料1についてご説明させていただきます。手元の資料1の1をご覧ください。円山動物園は 60 年以上の歴史がありますが、現在の基本構想が策定されるまでの平成 19 年 3 月まで、構想等はございませんでした。このような状況で運営していたところ、平成 17 年 7 月に寄付された動物飼料を職員が持ち帰る事件が発生しまして、平成 18 年 4 月、行政監査で、組織としての機能不全、構想と計画の不在、経営的視点の欠如について指摘を受けました。これを受け、平成 19 年 3 月に札幌市円山動物園基本構想を策定するに至りました。

次に今回ポスト基本構想を策定するに至った背景ですが、平成 19 年以降、基本構想に基づき運営をして参りましたが、施設の不備等により動物が相次いで死亡したほか、平成 27 年 7 月 25 日に死亡したマレーグマにつきましては、動物の愛護及び管理に関する法律の基準を遵守していなかったとして、平成 27 年 8 月に動物管理センターから改善勧告を受けるに至りました。そして、この改善勧告を受けまして、平成 27 年 9 月に獣医師を一つの係に一元化、10 月に

は獣医師1名を増員すると共に、28年4月からは、動物診療担当課長、診療担当係長を配置したほか、今年の4月からは新たに技術職の動物専門員を配置するなどの対応を行ってきました。しかし、その最中、不適正な契約事務が発生し、職員が処分を受けるという事態に至りました。また、動物園をとりまく環境につきましても、10年前と比べ、種の保存、動物の福祉、動物の愛護に配慮した、より質の高い施設整備や動物運営が求められるなど、大きな変化が見受けられたところです。こうしたことを背景としまして、時代に沿った、新たな円山動物園の運営指針を策定することとなりまして、改めて、新たな構想の策定にあたり必要な専門的かつ多角的なご意見を頂戴するため、皆さまにお集まりいただいた次第でございます。なお、後ほどご説明いたしますが、新たな構想の策定にあたっては、この検討部会のほか、円山動物園の職員プロジェクト、そして市民ワークショップ、アンケートなどを活用いたしまして、幅広い意見を聴取しながら策定して参りたいと考えております。

次に、この検討部会の位置づけですが、札幌市附属機関条例の定める、市民動物園会議の下部組織として、札幌市円山動物園が策定を進める構想の案について、ご意見やご指摘をいただく場となっております。皆さまから忌憚のないご意見を頂戴できればと考えております。

次に、資料の1の2をご覧ください。近年の円山動物園の現状をお伝えするため、来園者数と今年度予算について簡単にご説明をさせていただきます。資料の1の2ですが、平成28年度の来園者数が出ております。資料左の表、月別合計入園者数比較の平成28年度の欄の合計にありますとおり、平成28年度は、年間で791,024人の来園者でした。そして、平成27年は、981,119人でしたので、前年と比べまして、19万人の減、約19%の減となっております。平成28年の来園者数が減少した理由といたしましては、4月から6月の悪天候や11月以降の大雪などの影響と考えております。なお、今年度、平成29年度につきましては、平成28年度の入園者集を若干下回っているものの同程度で推移しております。

次に予算のご説明いたします。資料1の3をご覧ください。平成29年度の歳入につきましては、合計2億9,900万円を見込んでおります。その主な内訳は、入園料が2億6,300万円、売店使用料が約1,000万円、そして市民や企業から

の寄付金が 1,200 万円。広告収入は 400 万円程度を見込んでいます。次に歳出ですが、大きく動物園運営管理費と動物園整備費にわかれております。動物園運営管理費の 5 億 6,000 万円ですが、飼育展示動物や施設の維持管理など、動物園の運営に要する経費のほか、野生動物復元事業費となっています。次に、動物園整備費の 29 億 3,600 万円ですが、園内の獣舎などの整備のほか、動物園基本計画事業費といたしまして、先日、竣工いたしました、ホッキョクグマ館の建設費、アジアゾウ導入やおよびゾウ舎建設費などを合わせまして、27 億 4,700 万円となっています。以上から歳出合計は 34 億 9,600 万円、28 年度予算と比べまして、15 億 9,700 万円の増となっております。

吉中氏　予算歳出で、ホッキョクグマの新しい館の建設費として、動物園基本計画事業費がありますが、この動物園基本計画の策定はいつになりますか。

事務局（神課長）　基本構想が平成 19 年 3 月に策定されていますので、これに基づき 5 年ごとの基本計画を策定しています。現計画は平成 25 年 3 月策定となっています。

福津氏　歳出と歳入が 1 桁違いますが、これが普通なのか説明していただけますか。

事務局（加藤園長）　施設建設費には市債が入っています。残りの部分については、市の一般財源が投入されています。実際には歳出合計が 34 億 9600 万円あまり、歳入は 2 億 9000 万。残る 31 億のうち、建設費について 75%は市債が入っています。その他は一般財源が投入されています。

吉中氏　歳入はあくまで動物園の現場の予算と考えてよいですか。

事務局（加藤園長）　たとえばゾウ舎整備費は、一時的にかかる費用ですが、動物運営管理費 5 億 6,000 万は日々運営する予算。収入は 3 億となっていますが、人件費は入っていません。

吉中氏　入園料等は一般会計に入りますか。

事務局（加藤園長）　一般会計に入ります。

福井氏　公立の動物園というのは、だいたいこのようなもので、市税を持ち出していますね。旭山動物園のように、入園者収入で独立採算が取れている動物園はほとんどありません。

事務局（加藤園長）　運営費にかかる入園料のシェアについては円山公動物園は大きいほうです。

高野氏　予算について、切り詰められるところ、ここは必要だというところが、市として認識が共有されていますか。また、今後課題としてあがっていることがありますか。

事務局（加藤園長）　動物のエサ代、光熱費は確保できていますが、施設の維持修繕費が確保できずにいます。新しい建物を作ることはできますが、現に動物がいるところで不具合があるところが直せないという課題があります。また、過去 10 年間で新しい建物ができて、面積が大きくなりましたが、飼育担当者の人数が増えませんでした。今年やっと増えました。さらに、動物の福祉のことを考えて、地面がコンクリートから土になったりして作業が増えているにもかかわらず、人的ケアがされてないということもあります。このようなことが昨今の事件の原因の一つと考えられます。

福井氏　飼育されている動物に対して必要なアニマルウェルフェアや環境エンリッチメントは動物を幸せにするために必要なこと。しかし、床環境の改善一つとっても、大切なことであるが、忘れられがちと思う。この基本構想を作る上では、そういうところに、今飼育されている動物たちの環境改善のために予算が必要ということを、誰もがわかるようにしてほしい。動物園は独立採算で収入収支を合わせないといけないとうことは抜きにして、教育普及、種の保存や環境保全などの、公益的役割があり、そのために公的な資金投入が必要だという着眼点があっても良いと思います。

○ポスト基本構想の策定と検討部会の流れ

―事務局（エンビジョン（EnV））説明―

EnV　資料 2 をご覧ください。タイトルが（仮）円山動物園ポスト基本構想となっていますが、これは最初に園長がおっしゃられたように、この円山動物園ポスト基本構想というタイトルもできれば新しいものにしてはどうかということです。

（1）の背景と（2）の目的については、今、説明があったとおりです。（３）業務の全体構成について説明します。図の一番大きな円に円山動物園ポスト基本構想の策定とありますが、これが今回の業務の目的です。構想の中に書かれる項目のイメージとして、動物福祉、生物多様性などをあげています。その下に、小さな円がいくつかあります。そのうち一つには園内職員と書かれていま

して、その下に職員プロジェクトと書いてあります。現在、円山動物園の職員の方々もこの基本構想の策定に向けて、毎週会議を開かれ、話し合われています。これ以外に、左側には専門家、右側には市民、来園者。あるいは、国内外の動物園、博物館等のほかの施設、大学等の研究機関、そういうところのご意見やご提案も取り入れながら、より良い基本構想の策定を目指すというイメージになっています。この円の下、長細い四角に検討部会、シンポジウム、来園者アンケート等と書いてありますが、これは、今回の業務にあたって、EnVisionが担当させていただく業務です。この検討部会以外にも、たとえば子どもたちを集めて職員の方々と一緒に円山動物園のことを考えてもらうワークショップを開催します。あるいは大人を対象とした市民ワークショップを開催し、どちらかというとあまり動物園にいらっしゃらない方に参加いただいて、動物園の役割を一緒に考えていただきます。また、来園者アンケートも実施し、様々な意見を基本構想の策定に活かそうということになっています。次に、検討部会の流れを記載しています。検討部会は4回を予定していまして、今日が第1回目。第2回を来月12月13日に予定しています。それから第3回が2月7日、第4回が3月12日、予備日として2月26日を予定しています。予備日が設けてありますが、予定としては4回お集まりいただき、そのなかで基本構想についてご意見をいただく流れになっています。第4回目の最後の検討部会には、このポスト基本構想の文書の最終案を提示し、抜けている部分であるとか、さらに付け加えたほうがいいような部分をご提案いただくことにしています。その一つ前の3回目には素案をお示ししたいと思っています。これに向けて、第1回目と第2回目には、検討委員の皆さんにこの基本構想策定に向けたイメージを共有いただきながら、それぞれのお立場からさまざまなご意見をいただければと考えています。資料の残り部分は、先ほど紹介させていただきました、子ども向けのワークショップ、市民ワークショップと来園者アンケートについてです。また、2月の下旬から3月の上旬あたりに一般向けのシンポジウムも企画しています。円山動物園が新しい基本構想を策定しているということを紹介できるような場と位置付けています。最後にあります実施スケジュールですが、今、説明しましたさまざまなイベントを、10月から3月に向けて実施していきます。表の上から二つ目に検討部会がありまして、第1回、2回、3回、4

回と予定が入っていますが、その途中に子ども向けのワークショップを開いたり、来園者のアンケートを取ったりします。そこで上がってきた意見等はこの検討部会でお伝えしたいと考えています。

佐藤氏　この構想は年度内にまとめなければいけないのですか。

事務局（加藤園長）　来年度に入ってから、市役所の内部で策定プロセスを踏んで決定と想定しています。よって今年度中には整理をしたいと思っています。

佐藤氏　アンケートとかシンポジウムとか、かなりきついスケジュールですが、それがうまくまとまるか、ちょっと心配です。

吉中氏　関連してなんですが、第 4 回の検討部会では、最終案の提示、市民周知の方法、今後の基本計画策定に向けた留意点の検討という、議題が予定されていますが、その後、札幌市内部でオーソライズするプロセスがあって、基本構想、さらに基本計画が出来上がっていくと思ってよろしいでしょうか。つまり、3 月末までに構想成案が札幌市から発表されるわけではないですね。

事務局（加藤園長）　そうです。

事務局（神課長）　3 月には大まかなものが出来上がることを想定していまして、来年度パブリックコメントを実施し、最終的には来年の秋ぐらいにこのポスト基本構想を策定するというようなスケジュールを考えています。

吉中氏　今の説明から、今年度 3 月末までに構想全部が固まるものではないと理解しました。

水落氏　平成 19 年に作った基本構想は何年先を見据えたものだったのですか。つまり、基本構想に基づく基本計画平成 19 年から 28 年度およびこの改訂版が平成 24 年から 28 年度となっています。また、次期基本計画は平成 29 年から 33 年度の期間で一端策定に着手していましたが、問題が発生したので基本構想の策定に改めたということでした。問題がなかったら基本構想の策定はなかったのでしょうか。

事務局（加藤園長）　昨年度までは今年度に次の基本計画を策定しようという動きを取っていました。基本構想の時期は切っていませんが、概ね 10 年ぐらいというような感じではありました。よって、もう一回、5 年の基本計画は現構想に基づいて動いてもいいのかと考えていました。しかし、いろいろなことが起きて、やはり 1 回リセットするべきだということになり、今回全く新しい構想を策定するとい

う動きになりました。

水落氏　いろいろなことがあって見直すということになったのであれば、現構想のどこが実態にそぐわないとか、変えるべき項目はなにかという整理があるといいと思います。それがないと、この検討部会で何を話して、構想作成までに何を詰めていけばいいのかというのが、今の段階でわかりづらいです。現構想のどの部分がこれからにそぐわないのか、そこを重点的に考えていけば考えやすくなります。

事務局（加藤園長）　現構想は収支均衡と入場者数を目標年間 100 万人としていて、これがクローズアップされていました。このため、とにかく収入を上げなければいけない、お客を集めなければならないということに意識が行き過ぎました。その結果、基本的な動物のケア等に手が回らなくなり、結果としてマレーグマのような事故が起こった、と総括しています。新構想は現構想に続くものではあるが、基本的な理念等は結果として引き継ぐものはあると思いますが、いったん、前の構想と切り離して全く新しいものを作りたいと思っています。結果として、同じ様な内容も出てくるとは思いますが、まずは、現構想に引っ張られず考えていただきたいと思います。

吉中氏　今回作る構想の期間についてはどう考えていますか。

事務局（加藤園長）　構想の内容のうち普遍的な基本理念については、年数を定める必要はないと考えています。動物園は法的な裏打ちがなく、円山動物園は何をやるという決まりはありません。公園条例のなかにありますが、料金や開園時間が決まっているだけです。動物園とはなんだろう、円山動物園とはなんだろう、というような普遍的なところはーいずれは法規範、条例になるかもしれませんがー、10 年とか年数は切らない形でよいと思います。ただし、それに基づく下の計画については 5 年なり、3 年なりの期間ということになります。

吉中氏　あまり現行のものにこだわらず、長期的な視点で自由に意見を言えばいいということですね。

事務局（加藤園長）　この場では、あるべき論、理想論を語っていただければと思います。

吉中氏　柔軟な考えで、例えば、50 年後とか 100 年後とか、このようなイメージで、皆さんの理想の動物園を共有できればと思います。

福井氏　アメリカの動物園水族館協会（以下、AZA）の調査結果ですが、アメリカですら動物園の好感度が最近下がり気味だと報告されています。それは、“動物園の保全に対しての関わり方が弱い”と、市民が厳しい目を持っているからだそうです。そのような施設は必要じゃないというように見られているのです。このため、これからの動物園を考える上では、生物多様性保全というようなキーワードが重要になってきます。現構想にも生物多様性保全の考え方は含まれていますが、ただし、最後の方に目立つのは入園者何人を目標とするとか、収入増をどうするとか、コストをどう削減するということです。これから作る構想はどこにウエイトを置くのか､あるべき姿についてしっかりと書き込むべきです。この構想を作るときには円山動物園を中心に考えることになりますが、これが世に出たとき、日本全国の動物園、場合によってはもっと大きいスケールで、世界の動物園もが意識するぐらいの大きな夢を抱く様な内容にすべきと思います。たとえば国立動物園を作ろうという話などです。日本には動物園法がないので、動物園自体が法的に宙ぶらりんな存在になって、このため動物園が進むべき道が明確になっていません。このため、周りにも認められません。先ほどの AZA の話も、動物園からのアピールが少ないということも原因にあるようです。個別にはやっているが、動物園全体としてアピールが少ないのです。アピールが少ないから批判的な市民が評価してくれません。市民に動物園について認めてもらうようにすることが大事だと思います。その辺について、オブザーバーの先生からご意見はありませんか。

小菅氏　福井委員が発言したとおり、動物園は（法的）基盤がなく、100 数十年、日本の場合はこの状態が続いてきました。世界でも同じ様な状況があって、動物園は何に向かって活動すべきなのかということが、世界中で議論になりました。その中でアメリカ、ヨーロッパの動物園はいちはやく、生息地との関わりが非常に希薄であるという認識となりました。このため欧米の動物園は生息地との関わりが持てないと動物園運営はありえないということになってきました。そこをきちんとした形で押さえることで、税金の投入も可能となると思います。単に、面白い、楽しいということだけで税金を投入するというのは、これからは理解が得られません。ですから、多様性というのが大きなキーワードになると思います。動物園は多様性のある状況をいかにして作っていくかということ

を指針としてしっかりと示す必要があると思います。それが法的にきちんと動物園法にみたいな形になればいいのですが、残念ながら、動物園法の制定に係る議論は、前回の種の保存法改定の会議のなかで、中央環境審議会で議論される前の検討会段階で環境省が作らないと決めてしまいました。私は中央環境審議会で、それはありえないという話をしましたが、覆りませんでした。でも、もう一度議論すべきだと思います。動物園の果たすべき役割を考える際、自然環境と人との関わりについてまでしっかりと踏まえたものを作っていかなければ､今後も動物園の存在意義自体が揺らぐということになるかもしれません。これを踏まえ、今回の構想検討は、一自治体として動物園というものをこういう形で将来的にやっていきます、ということが議論されますから、これは初めてのケースではないかと思います。

動物園というものは、きちんとした科学的な議論をしないで今まで作り上げられてしまいました。であれば、きちんとした形で議論をした上で、科学的な根拠（存在する根拠）を持った動物園を作り、その目的を明確にすることが必要だと思います。園長の発言にありましたが、動物園条例のようなものができると、おそらく日本中の自治体立の動物園は衝撃を受けると思います。そういうところで触発された各自治体が、同じようなことを考え、動物園を持つ日本中の自治体が動けば、国を動かして動物園法の制定や国立動物園の設置ということに結びつくのではないか思います。私は、ここで行われる構想策定に向けての議論がそのスタートとなるのではないかと期待しています。

吉中氏　構想の検討に係る意見については、あまり型にはめるのではなくて、哲学的と言いますか、動物園について原則的な議論をまずした上で、基本構想というのがだんだん見えてくるという形で、議論を進めていくのがいいと思います。とはいえ、どのような議論すればいいのかというものが少しでもあったほうがいいということで､資料 3-1 構成案が示されています｡ただし､これに縛られず､小菅先生もおっしゃったように、本来、動物園がどうあるべきか、札幌市の動物園が何を目指すのかという観点から、広い議論いただければありがたいと思います。このような認識の上、構成案について説明願います。

○構成案について

―構成案説明―

事務局（高橋係長）　たたき台と致いたしましてご用意をさせていただきました。本当の素案という段階のものになっております。最初に設置目的ですが、ここの部分は検討部会での皆さんのご意見を参考に書いていきたいと考えております。そして次に実施事業ですが、こちらは、現在想定される事業を記載しております。さらに理念や役割だとか、運営方針、目指す方向性、そしてこれを実現するために動物園職員はどうあるべきか。また市民や各種段階はどのような役割が考えられるか。そして円山動物園、今後どういった動物を飼育していくか、などといったコレクションプラン等を、この構想に盛り込んでいきたいというふうに考えております。先ほど委員長からもありましたとおり、これに捉われず、さまざまなご意見をいただければというふうに考えております。

事務局（加藤園長）　いま構成案を説明しましたが、動物園としてどういったものを作成したいかといいますと、先ほど、福井先生からありましたが、要するに円山動物園を知らない人に見てもらっても、円山動物園は何のために何を目指してどういうことをしたいのか、どういうことをしているのかということを、構想を見ればわかってもらえるようなものがあればいいと思っています。それが、市民・道民・国民に限らず、飼育する動物の生息地との関係もあるので、海外の人にも円山動物園を説明できるものであってほしいのです。例えば構想を英訳して、円山動物園はこういうところですと見せたら、なるほどとわかってもらえるのが一番いいと思っています。

また、動物園の職員のマインドが一番大事なので、全職員がそれを理解して、同じ方向を向いて、仕事をしていくということが大事で、それができれば、いい動物園になっていくと思います。円山動物園は何のために、何を目指して、どういうことをしたいのか、しているのか、ということがわかるものがポスト基本構想ではないかと思っています。よって、構想は長々と書くものじゃないと思っています。前回基本構想はハード的なものも入っているので厚くなっていますが、そんなに重たい（分量的に）ものではないと思っています。これを前提に、活発にご議論いただきたいと思います。

佐藤氏　ということは、お金のこととかは置いておいて、動物園とは何なのでしょう。

円山動物園をどうしていったらいいのでしょう。どういう円山動物園が市民のためであり、日本全国の動物園のネットワークとか、世界的なネットワークのなかで、円山動物園がどうしたら価値ある動物園としてやっていけるのか、そのようなことを発言すればいいのですね。

事務局（加藤園長）　そうです。たとえば、ホッキョクグマを飼育展示しているのは何のためか、そういうことを説明できるベースが必要となっています。なぜ、動物園はゾウをミャンマーから連れてきて飼育展示するのか。その背景にはこういう考え方があって、それを実現するためにこうやっているのです、と説明できるようにしたいのです。

佐藤氏　市民動物園会議でもいろいろな話をしてきたので、その続きみたいな感じです。言い方は悪いけれど、平成 19 年の動物園基本構想策定までは結局、見世物小屋みたいな動物園っていう感覚から抜け切れてないところがあったのではないかと思います。しかし、今、世界的に見て動物園とはそういうものじゃない。だからその古いものを全部取っ払って、円山動物園の体制も変わり、人も変わり、今なら円山動物園は大きく変われると思います。つまり、この機会に古いことは取り払って、これから先に向けてどうしていきたいかをここで話せばいいということですね。

事務局（加藤園長）　そうです。先日行ったカナダでは、カナダ州政府の人、動物園関係者、マニトバ大学の人、いずれも盛んにエデュケーションとしての機能を動物園に求めていました。それは、子どもとか市民等に環境教育をするだけはなく、たとえば、この円山動物園をフィールドにして学生が学位を取るとかというような、そこまでのことがこれからの動物園に求められるという話でした。外国の話ではありますが、円山動物園は博物館相当施設でもあるので、やはりそのようなことも考えていかないといけないという思いはあります。

福津氏　札幌人図鑑の仕事で、動物園の職員の方を取材したことがあります。円山動物園の飼育員になるのはとても狭き門で、みんなここに「来たくて来たくて」来た人ばかりで、ほんとに動物に愛情を持って仕事をしていると感じました。キリンを追いかけて爪を切るなんていう話がありましたが、みんなができるわけでも、どこでもやっているわけでもないそうですね。とても印象に残っています。また、市立大学の斉藤先生が、獣舎の温度管理がどれだけハイテクかとい

う話をしてくれました。そういう情報はあまり紹介されないので面白いのです。円山動物園が新しくリニューアルするたびに、温度調整がどれだけハイテクになって、どれだけ動物にとって良い環境に変わったのかを、たとえば高校生が取材に入ってデータを取り研究するとか、職員の方たちの奮闘ぶりを放送局の高文連のネタに提供するなど、円山動物園の取り組みをもっと全国に発信できるといいと思います。園長がおっしゃった教育に関することはすぐにできるし、是非やったらいいと思います。むしろ外部に対して、動物園にはこういう場所がある、こういう事もできるんですよというアピールがもっと必要ではないかと思います。

吉中氏　まず最初、資料 3－1 のリストで言いますと、3 番、4 番、6 番の理念、役割、目指す方向性、この辺について、次に意見交換をしていけばいいのかと思っております。では、次の議事 4 番について意見交換をしたいと思います。なお、ここからは私も意見を言えるようにということで、進行を EnVision の方にお願いしたいと思います。

○意見交換

EnV　現行の基本構想だと 25、6 ページありますが、新しいものは半分ぐらいとかもっと少ないイメージですか。

事務局（加藤園長）　15、6 ページとかぐらいになるのではないでしょうか。箱物のエッセンスについては省きます。

EnV　検討部会とは別に職員の方々のプロジェクトが行われており、職員の方々のなかからもいろいろ意見が出ているかと思います。その職員のプロジェクトについて紹介いただければと思います。

事務局（神課長）　職員プロジェクトですが、これまで 3 回集まりいろんな議論をしています。具体的には、世界の動物園はどうなってるのか、これまでの動物園の方向性はどんな感じだったのか、振り返りをしています。そういったことを踏まえて、円山動物園にとって何が大切なのかということについて話し合っています。今は具体的なことについて意見が出ていますが、最終的にはこれが、それを達成するための、理念とか、役割とか、これから目指す方向性というものにまとまってくるのではないかと思っています。

EnV　職員プロジェクトは、全ての職員の方の意見が反映されるような構造になっているのでしょうか。

事務局（神課長）　組織体制としては、飼育については１係２係とありまして、そこでは班体制を組んでいます。職員プロジェクトには班長や各係の若手が代表で出てきているので、代表者が飼育員の声も集めて、プロジェクトのほうにそれを持ってくるというようなことをしています。

EnV　その職員プロジェクトと、この検討部会の関係ですが、ここでいろいろ出していただいた意見も、職員のほうにも伝えていくということですね。

事務局（神課長）　この検討部会の、内容につきましては、職員にもちゃんと勉強してもらって、どんな検討をこの部会でされたのかということを踏まえながら、内部の検討をしていくということになります。

EnV　ここにいらっしゃる専門の方々のそれぞれの立場からご意見、ご提案をいただくことに加え、是非こういうことを職員の方々にも議論してもらいたいとか、考えていただきたいとか、そういう提案をいただくこともできますね。

事務局（神課長）　ご提案等をいただき、職員の話し合いの中で揉んでもらうということも考えています。

EnV　逆に、職員の方から出てきた話も、ここで紹介させていただいて、基本構想に取り込んでいくというようなイメージでよろしいでしょうか。

事務局（神課長）　そうです。

EnV　今日の検討部会では、自由にいろんな意見を出していただき、とくに何か一つの答えを出すといった場ではないということですね。

事務局（神課長）　今日はそういったところです。

EnV　吉中さんは構想作りについて、どういうふうに進めればいいのか、職員の方やさらにほかの声をどう取り上げていくのがいいのか、お考えはありますか。

吉中氏　具体的にはないのですが、できるだけ透明性のあるオープンな議論をいろんな方としながら、いいものを作っていくことが大事と思っています。そして構想を作った後、それがみんなの構想となり、円山動物園が札幌市民一人一人の動物園なんだと、思ってもらえるような形にしないと、勝手に役所で作ったのだ

ろうと思われるともったいないと思います。そういう意味で、職員の方、この検討部会、それから動物園に来られる方々とか、いろんな場を使っていろんな意見を聞きながら作っていくのがいいのかと思います。

事務局（加藤園長）　職員のプロジェクトについては、終わったら 1、2 日後には全部その議事録を職員全員に流して、意見があれば出してくださいというふうにしています。ですから、ここでの議論についても、必ずオープンにするというようなことになりますので、あとは職員個人の意識の問題になります。

EnV　福井さん。ほかの動物園とか、円山以外の構想などもご覧になられていて、また動物園学を教えてらっしゃる立場から、このような議論は一般的なものとお感じでしょうか。

福井氏　どこの動物園も同じようなことを現場レベルで、特に若い飼育技術者、獣医も含めて議論していると思います。小菅さんが言ったように、今回、円山ではいろんな問題があったのですが、これをむしろ好機と捉えて、ここから全国に、あるいは世界に、円山動物園ここにありというのを知らしめるような、何かきっかけにならなきゃいけないと思います。私は、円山動物園との付き合いが古くて、学生時代にここでバイトを 2 カ月間させてもらいました。今いる飼育技術者の熟練の方々に指導してもらって、動物の面白さと動物園の面白さを教えてもらいました。旭山動物園にいたときから円山動物園を見ていましたが、とても技術がありますし、円山動物園独自の自然再生プロジェクトとか、野生復帰のプロジェクトとか、ホッキョクグマの繁殖とか、日本、あるいは世界に誇るべき、飼育技術があります。だけど何か、表現下手なところがあるのか、問題がバラバラと起こって市民やマスメディアが敵になり、批判的なってしまい、その辺がとてももったいないなと思います。確実に一定の飼育技術がある一方で、そういう健康管理面の獣医学的技術が端から見ていて非常に拙い、乏しい部分があることも事実かと思います。旭山でうまくいっていたものをモデルケースとして学ぶべきこともあると思います。円山もいいところを取り入れつつ、市民に愛される、市民にわかってもらえるような表現型っていうのを目指していかなければいけないと思います。大きい話では条例や構想作成があるのですが、やっぱり円山動物園の現場の中にも課題があると思います。園長、飼育課

長、係長、現場の職員の間で、どれだけ密にコミュニケーションを取られていたか。現状で現場の意見がどれだけ上に上がるような体制となっているかはわかりませんが、飼育の現場で熱く語られているところが、ちゃんと上に上がって来て、市民にそれが伝わるようにサポートしてもらいたいと思います。それは園長の力にかかっていると思います。法律的なこと、構想に対する市民の理解、飼育の現場がバランスよく融合して前に進んでいけばいいというのが願いです。

EnV　福津さんにお訊きしますが、動物園の魅力を来園者の方に実感してもらうということは当然として、それ以外にどういうところと繋いでいけばよいと思われますか。

福津氏　今、市立高校コンシェルジュというものをやっていますが、動物園は教材の宝庫だと思っています。私が知るところでは、ここ数年はコウモリの観察会だったり、夜の ZOO であったり、高野さんの活動みたいなものであったり、地域の人たちがどんどん入っていける場になってきたと感じています。しかし、もともとのコアなファンに支えられている一面もあると思うので、日ごろ動物園にあんまり来ないような、そんなに興味がないような人たちにも来てもらうようなきっかけ作りは、まだ伸びしろはたくさんあるなと感じています。

ところで、平成 27 年の改善勧告の以降はどうなってきたのでしょうか。この後の議論をするにあたって聞いておきたいことです。獣医師が一元化したり、職員を増やしたり、その後、いろんなことをしてきましたが、この 2、3 年のなかで改善されて良くなったこと、逆に困っていることがあれば、そこを踏まえて議論したほうがいいのではないかと思います。ここ 2、3 年、職員の間ではどのようなことが話題にのぼり課題になったのか。その辺りが気になりました。

事務局（加藤園長）　まず一つ、獣医師をチームにしたというところで、今までは 1 係と 2 係にそれぞれわかれて獣医師がいました。そうすると、自分の係の動物だけを見ている状態のなかで、獣医師同士のディスカッションってなかなかできていませんでした。今は、係長がいて 3 人の担当がいて課長がいるなかで、獣医同士がコミュニケーションなりディスカッションをして、みんなでそれぞれの動物に対応するということができるようになったという利点がでてきた。あと、開園時間

を前後短くし、今まで短かったミーティングをしっかり行い、十分引継ぎをして現場に出ていくということができるようになり、職員間のコミュニケーション、情報交換が非常に良くなりました。あとは休園日も前は 3 日しかありませんでしたが、35 日に増やし、月に 2 回と春と秋に増やしたので、その日に、たとえば、お客さんがいては危ない、できないこと等を集中的にできるようになりました。また、今年に入って、新たに動物専門員という職種で 3 人雇用し、元の飼育員も 7 人が転任し、職場環境も変化し、互いに相談しながら業務ができるようになっていると思います。

福津氏　課題はありますか。

事務局（加藤園長）　まだ制度仕組みが整っただけなので、そこをどう上手に使っていくかという、つまり魂を入れていくのはこれからと思っています。それを、今スタートしたばかりのときにきちっとやっとかないといけないと思います。

EnV　佐藤さんは動物園会議に出席されてきていますが、ここ何年かで円山動物園が変わってきた部分であるとか、まだちょっと物足りないなというような部分っていうのは、どういう感想をお持ちですか。

佐藤氏　まず、よく今まであの体制で頑張ってきたなということ、つくづく思いました。これだけ施設が増えて、動物が増えているなかで、ほんとに飼育員の皆さんが努力されてそれを維持されてきたのですが、これからの動物園を考えたら、科学的・専門的な知識を持っている方にもっとたくさん入っていただかなければやっていけないのだろうと思いました。そこのところが変わったところが、まず動物たちのためにも良かったと思っています。ですから、せっかく体制が整ったので、今、園長さんおっしゃったように、そこを最大限に活かして、動物の QOL を保証していく動物園というふうになっていっていただけたらと思います。

事務局（加藤園長）　金子先生、これまでの経過を見られてきてどうですか。

金子氏　今、佐藤さんがお話しになったような感じで、ほんとによく職員の方、今まで頑張って来られたなというふうに思いました。マレーグマの事件の後、国内の他園との比較等をして、そういう資料も拝見して、あの資料を少し皆さんもご覧になったらいいと思うのですが、やっぱり円山動物園っていうのは、ほんと

に古いタイプの動物園と感じました。結局、飼育係の方々、素晴らしい方いらっしゃるのですが、その仕事がいわゆる、飼育員業務として位置づけられていたわけではなくて、現業の職っていうことで、お掃除だとか、それから餌を作るとか、そういうような形の職種になっていたのです。他の動物園と比較をすると、どんどん変わってきたなかで、円山だけが置いてかれていたというような状況があったのかなというようなところがありました。確かに事件が続きまして、不幸なことではありましたが、生まれ変わるのにいいチャンスなのかというふうにも捉えられると思います。最初、基本構想はそのままにして、計画のところをちょっといじってというような話もあったのですが、話しをされているなかで、基本構想からしっかり考え直して、小菅さんがお話しになったような条例化まで持っていこうということになった。これはもう 180 度転換、考え方がガラッと変わることだと思います。ですから、今までやってきた動物園を少し発展させるということではなくて、発想から何から全部変えるということになります。1 回白紙に戻して、新しいものを作り直すぐらいの考え方で基本構想をまとめていかないと、今までのものになにか付け足します、増築していきますよっていうようなことでは、世界のなかの円山動物園というようなところにはいかないのかなと思います。その一つのキーワードというのが、多様性保全であるのですが、掛け声はかかっても、では具体的にどうしてくのかという、その辺をきっちりと議論をしないと、やっぱり絵に描いた餅になってしまうと思います。多様性、環境教育、域外保全、域内保全、言葉としてはいっぱいあるのですが、ではそれを現実的にしていくためには、基本構想は構想で、これはビジョンなので、あまり中身のところまでは詳しく書くということではないと思うのですが、単純な絵に描いた餅になってしまってはいけません。構想には予算の裏付けの話もあるでしょうし、組織の体制の問題もあるでしょうし、少し具体的なプランニングを考えながら、構想＝ビジョンというのを 180 度違うような形で作っていく必要があると思います。

EnV　水落さんにお伺いしてもいいですか。現在の基本構想を改善し、どう職員の意思を統一していくか、どうアピールしていくか、何かそのあたりのご意見をいただけますか。

水落氏　答えにならないかもしれないが、札幌市が経済活性化のために今、力を入れて

いるのが食と観光です。観光という観点で考えていくと、ここにコンセプト、札幌市における、日本における、世界におけるっていうのがあります。観光という観点からいくと、今、外国人観光客、インバウンドが年々かなりの勢いで増えているという現状があります。先ほどの入園者数の年度比較見ていきますと、増えたり減ったりとか、デコボコがあり、天候に左右されたり云々というのがあると思います。一方、外国人観光客が年々増えており、札幌市内に入ってくるインバウンドの数は増えているのは間違いないので、同様に、来場者のなかの外国人観光客の数が増えていればいいのですが、そうはなってないということでしょうか。たいして来ていないということであれば、そこは一工夫する必要があるのかなと思います。誰のための動物園なのだろうかということにもなるかもしれないですが、市民のための、道民のための、あるいは道外の観光客のための役割というのもあると思うのですが、外国人の方が来られるような動物園であればいいのかなと思います。同時に、今その外国人観光客の悩みの一つに、夜の過ごし方というのがあります。札幌にせっかく観光にきて、泊まっても、夜、食事した後にすることないというのが、インバウンド客のかなり大きな悩みになっています。どこにも行くところがないのでホテルにいるしかない。だから、これは思いつきですが、動物園側の問題もあるとおもいますが、外国人観光客を夜の動物園に来てもらうっていう仕掛け等があってもいいのかなと思います。

もう一つ、全然違う話ですが、動物園とはやはりみんなに愛されるべきものじゃないのかなと思います。応援してくれる人を一人でも増やしてほしい、増やしたい。いわゆるサポーター制度ですが、それを個人でもいいですし、法人でもいいと思います。個人として、私は動物園大好きです、動物園応援していますという、そういうサポーターを、お金を取るとか取らないとかそういう細かい話は別にして、増やすことが必要と思います。あるいは企業側にしても、動物園を応援してくれる企業を募る、サポーター制度を作る。企業側も応援してくれる企業があると思います。CSR といいまして、企業の社会的責任というか、これに取り組んでいる企業がかなりあります。円山動物園を応援してくださいということです。ただ、応援してくださいだけではわかりづらいので、いろいろ設定はしないとならないかもしれないです。ただ、そういう企業、あるいは

個人で円山動物園を応援してくれる人たちを増やしていき、積極的にそういう人からの PR をしてもらうというような取り組みがあってもいいのではないかと思いました。

事務局（加藤園長）　正確な統計ではないのですが、来園者のうち札幌市民が 6 割から 7 割の間、残りが道内・国内で、外国人はたぶん 0.5%ぐらいだと思います。円山動物園は大型バスで観光客が来るような施設ではありません。大型バスで来るのは、遠足とか、幼稚園とかだけです。感覚的には外国人も少しずつ増えているなと思います。その方々は個人客の方で、バスで来たり、タクシーで来たり、レンタカーで来られたりとかいう方です。多くはたぶん台湾の方とか。あとは韓国の方が多いのかなと思います。

福井氏　やっぱり面白い動物園、愛される動物園を作らなければいけないというところが根本にあります。また、展示されている動物が生き生きと動いて楽しいところです。改めて旭山動物園がなぜあれだけ市民に愛され、みんなに注目してもらえたのかと考えると、やっぱりそこにいる職員が楽しく、動物のことが大好きで、動物はこんなに面白いから見てほしいというのを、園長以下職員全員がやっていたのが原点なのだろうと思います。職員同士が刺激し合い触発されて、自分の飼育している動物がどれだけ素晴らしいのかということを見せていました。たとえば、アカゲラの舌、採食シーンを展示する。こんなの誰も自然界で見たことないですね。これを市民に見せてあげる。こんなちょっとした発想を、簡単にアウトプットできるっていうような旭山動物園の体制、そういうところが原点にあるのではないかなと思いました。旭山にいると、職員はどんどん市民の前に出ていきますし、私を見てもらったらわかると思うんですけど、おしゃべりが大好きです。とにかく市民に動物の素晴らしさを伝えたい。みんなそうだったのです。又聞きですみませんが、多くの円山の職員はシャイだと言われています。ときには動物を見に来た人に、背を向けるとか、動物の情報を隠そうとするような話もちょっと聞いたことがあります。又聞きなので本当にそんなことあるのかなとは思いますが。そういうシャイな意識が少なからずあるのかもしれません。

そこの意識改革というのは、園長はじめ園の職員がしないといけない。市民の税金を使っている市民の動物園なので、こんなに素晴らしい動物ですよ、とい

うことを伝える。自分だけ面白いものを独り占めしないで、みんなに教えてあげてよ、それがあなたの大事な、飼育技術者の一番大事な仕事の一つなんだよ、ということを全員が意識してほしいと思います。動物を知らない人に知っていることを教えてあげる。それが飼育技術者の原点なんじゃないかなと思います。そこはソフトなので、やっぱり園長以下のスタッフの人がしっかり意識統一する必要があると思います。構想をいくら議論しても絵に描いた餅で、もっと大事なことはそこにあると私は思います。それをサポートしてあげるための後ろ盾として、構想が機能すればいいのではないかと思います。また、動物が素晴らしいという教育を市民にする上で、こんな素晴らしい生き物がいるから、それを守っていかなきゃいけないということがあります。それは、まさに動物園が生物多様性保全に関わるということであると思います。こんな素晴らしい動物がいるから、生息地を大事にしましょう、ということをどうつなぐのかが、動物園の役割じゃないかと考えます。

EnV　高野さんは地元の子どもたちを相手に円山動物園を利用されています。たとえば、円山動物園の取り組みとして、周辺の円山原始林や円山公園、また、自然だけではなく地域の方々や子どもたちとの付き合い方についていかがですか。

高野氏　福井さんの話にもちょっと通じるのですが、もっとインタープリテーションができるスタッフ、話せる人が必要と思います。子どものふとした疑問に答えられるとか、面白く解説できるとか。「知っている」と「伝えられる」は違うと思うので、何かその辺の技術力が必要と思います。伝えられる技術を伸ばしていければ、インバウンドが来たり、地域の人たちがリピートしてくるのかなと思います。私が子どもを連れてくるときに、何で何かがいないの？とか、何でこれがいるの？とかって聞かれることがあるのですが、私は答えられないです。それはじゃあ誰に聞こうみたいな話になると、やっぱり飼育員さんとなりますが、飼育員さんは会えるときと会えないときとかがあったりとかする。学校がまとめて来たときにそういうことが伝えられるとか、展示でもいいですし、何かそういうのがあったらいいのかなと思います。一つは何か伝えられる、見せられる、見てわかる、見える化できているとかがあると、子どもたちとか、海外の人とかにはわかりやすくていいのかなと思います。あと、どうしても小学生、幼稚園のアテンドでつくことが多いのですが、ここでやっている活動で大

学生のスタッフがたまに来たりして、彼らが 10 何年ぶりに動物園に来ましたといっていました。小学校の遠足か何か以来と。その中間が、中高生が抜けているのです。さっき福津さんがいろんなところと協同できるのではないかということをおっしゃっていましたけど、やっぱり高校とか中学とか、地域とか市民とか、そこの層を取り組んでいければ、何かもっと続くのではないかと思いました。

事務局（加藤園長）　伝えるという話に関して、今年から動物専門員という職を作りました。それは一般職の職員で、今までの飼育係と違うから、科学的根拠をもってしっかり伝えられる職員じゃなくちゃいけない。そこは組織として教育していくし、一人一人の動物専門員が自分で努力をして勉強してそうなれるようになっていかないと、これからの円山動物園は駄目だと思います。

小菅氏　そのとおりです。それと先ほど福井さんが、自分の知っているものをどうやってうまく伝えるかというのが大事です。そういうことが、これから話す動物園の大きな役割のところへつながっている。しっかりと飼育する、要するに現場にいる人たちがちゃんとわかって、自分たちの活動が、ただ楽しいで済ますのではなく、それが多様性を保全することにつながっているとか。そういうことと結び付けやすいような、そういう理念みたいなのがうまくここで構築していただけると、現場の人たちのモチベーションもあがると思います。自分のやっていることがただそこで終わりなのではなくて、将来にはこういう社会を作っていくんだということに直接つながっていくんだ、ということがわかってやるのと、ただ面白かったよねで終わるのとでは、ずいぶん違うと思います。そこのところがきちんと組み立てられることが、とても重要なことじゃないかと思います。今、園長が言ったとおり、これからは専門員になりますから、自分で発想して、自分で企画して、自分で実行する、その評価も自分がする。そういうことができる職員を私たちが育てていかなきゃならないといけない。それができて初めて、動物園というのが動き始めると思います。みんなが、目的、つまり“ここへ向かっていく”というのが必要なので、それをきちんとわかりやすくしないといけません。それをできれば動物園の中だけでなくて外側から見たときにも、動物園はこういう考えなんですということがわかれば、それはもう市としてこういう動物園をやってるんだということを説明することになると

思います。私たちはこういう動物園ですとわかるようにできるような構想を作っていくというのが重要なのだと思います。

EnV　高野さんは、まさにこの近辺の円山に生息する生き物を子どもたちに教えて、実際に見せる、ということをされていると思うのですが、動物園と地域の生き物との関わりというのは、どういうふうにお考えですか。

高野氏　遊歩道とか円山の原始林とかに歩くことが多いので、北海道ならリスが一番見やすいですし、鳥類、リス類とかが見やすいかなと思います。北海道は独特な生態系があり、生き物がいますので、そこはまずみんな知らないといけないけど、学校でもあまり習わないです。大きくならないと習わないので、モグラはいないとか、クマはヒグマしかいないとか、わからないところがあります。そのいい教材として都市と自然という言葉がありましたけど、私たちも野外でそういった動物を実際に見て、触れてまではいかないですけど、見た後にまた動物園に入って、何でここにいるのと動物園にいるものは違うのか、とかいう様な話をしています。餌付け問題も、遊歩道のほうはたくさんありますけども、動物園は違うというところを、動物園を使って子どもに何か意識づけできる、いいツールとして使っています。

EnV　どちらかというと、外にいるものと動物園のなかにいるものは違うという感じの紹介の仕方になるわけですね。

高野氏　そうです。

EnV　福井さんは、そのあたりいかがですか。動物園としてその地域の生き物、あるいは地域の環境教育についてどう思われますか。

福井氏　“つなぐ”ということがキーワードなのだろうと思います。動物園というのは、飼育動物がいる人工的な環境です。基本的には動物園の動物は、ほぼ 8 割、9 割と、ほとんどが動物園生まれ、育ちです。だから基本的には野生動物ではない。だけど特定のリハビリテーションプログラムに乗せればちゃんと野生復帰ができる、野生を決して失っていない生き物です。なので、動物園は、野生にいる、自然界にいる野生動物のいわば代表選手を自分たちが預かっているわけです。だから、その代表選手の生息地、もっと身近な例で言うと、たとえばここにいるオジロワシ、オオワシ、あるいはエゾリスの自然界での現状や生活の様子を伝えることが重要です。外部や市民の方、そしてマスメディアだとか、

福津さんみたいに飼育技術員の仕事をいろんなところに発信するような立場の人が、もっとつないでいく。まさにこの検討会もいろんな人が入ってつないでいると思いますが、つなぐということで、動物園が野生にいる野生動物の暮らしぶりを一般市民に、一番身近な玄関口として子どもたちから大人まで伝えていくというところが、もっと強く出ていかないといけないのだろうと思います。キーワードは、つなぐだと思いますね。

事務局（加藤園長）　吉中さん。生物多様性について、動物園は何ができるとか、もっとこうすべきではないかというようなことはありますか。

吉中氏　いっぱいあると思うのですが、今のつなぐという観点からすると、動物園で培われてきている飼育の技術であるとか、そういうのがどうやってその生物が生息している生息環境の保護に役立っていくのかっていうような議論がきっとあると思います。今、動物園の役割っていうのは世界でもいろんな議論が行われていて、動物園関係者の方はみんな危機感を持っていると思います。それで動物の権利とか動物愛護の団体からは、もう動物園なんて不要だといわれている。そんな人間の勝手で閉じ込めておくのはけしからんという意見、非常に外国、世界的に強いですね。それに対して、閉じ込めてやっているけど、そのなかでいろんな調査研究、飼育過程の調査研究したことで、それが野外、本来の生息環境、生息地の保護にこう役に立っています、というようなことがあります。直接的に言うと、傷病鳥獣をリハビリして返すというのも一つでしょうし、あるいはたとえば思いつきで言うと、これから温暖化がどんどん激しくなっていってもう避けられない状況になっています。そういったときに、生物がいったい 2 度温度が上がったときに、どういう変化に耐えられるのかとか、どういう適応があり得るのかみたいな話は、たとえば動物園のなかであれば少し実験もできると思います。生息環境がちょっと変化したときに、野生生物がどう耐え得るのかみたいなことです。そういう調査研究は、たぶんこういう飼育下で非常に期待されていることだと思います。そういうことが生物多様性条約の会議でも、動物園という飼育下での保護と、もともとの生息環境の保護との関係みたいなのがずっと議論されています。これらは全然別個のものじゃなくて一緒に考えていけばいいし、動物園がこれから生き残っていく上では、そのあたりをしっかり実施して、さらにそれを PR していく必要があるのではないかなと

思います。観光や環境教育で、飼育員の方、あるいは専門員の方が説明するというのも、すごく大事になってきていると思います。いろんなデータが出ていますが、動物園でやはり環境教育と言いますか自然保護教育、動物に対する意識を高めてもらうということ、これからも大きな役割になっていくと思います。それが本当に役立っているというような研究もいろいろ出ていて、訪れた中学生、小学生、幼稚園児がその後、何か意識が変わったのかとか。実際に行動を起こしたのかという様な研究で、いろんな報告が出ています。そのなかで、やはり行ってただ見て帰ってくるのではなくて、話を直接聞いたとか、そういうのが有効だというのが出てきていますから、ますます今後重要になっていくのかなという気がします。また、生物多様性の絡みで言いますと、世界的な目標として 2020 年を目指した生物多様性の目標というのがあって、もう時間がほとんどないので達成できないと、みんな思っているのですが。それで、その次の目標をどうするかという議論が生物多様性条約のなかで始まっています。そのなかでも動物園、水族館に期待しているものというのは、たくさん出てきています。世界のなかの円山動物園、あるいは国のなかの円山動物園、札幌市、北海道のなかの円山動物園というのを考えるときに、そういう国際目標だとか、あるいは国際目標を国レベルに落とした国の戦略計画だとか、そういうなかにどう位置づけていくのか。あるいは今、どこまでいっているのかっていうのを見極めつつ、もっと世界に打ち出すチャンネルを増やしていくといいのではないかなという気がしています。皆さん、もうご存じかもしれないのですが、今回こういう仕事をお引き受けするなかで、世界の動物園がどういう現状になっているのかなというのをいろいろ調べてみると、いろんなレポート、論文が出ていました。ショッキングなものとして、コスタリカでは、二つある公立の動物園は閉鎖します。もうみんな野生に返しますというような記事が出ていたりするのですね。それはやはり人間の勝手で飼っているのが本当にいいのかというのがあって、コスタリカはちょっと特殊な例ですけど、そういうなかで、動物園にはこういう重要性があるのだということを、しっかり打ち出していくことが必要です。そのために飼育員の方も一人一人、これだけ貢献しているのだということが実感していただけるとやりがいも出てくるだろうし、実際に効果も出てくるのかなと、そんな気がしています。

EnV　なかなか世界における役割というのはイメージが難しいように思います。ただ、園長もおっしゃられたように、札幌市の税金を使って遠くの国の生き物を飼ううえで、世界に目を向けながら地元との関わりを考えることが必要です。賛否両論あるかと思いますが、円山動物園が世界で絶滅が心配されているような生き物に携わることについて、いかがお考えですか。福井さん、いかがですか。

福井氏　動物園不要論とか、動物愛護論者からの動物園批判はよくある議論なのですが、今もう目の前に、動物園生まれ、育ちの動物がいるわけですから、それらを安易にもう要らないからって野生に返すというのは乱暴で、彼らのこれからのことも考えなければいけない。よくも悪くも人間のエゴである動物園なので、やっぱり代表選手としての飼育動物、今預かっている命をしっかりと、その野生での生息地と結びつけて、野生にいる現状が少しでもよくなるように、今の自分たちは何ができるかっていうことをもっと生産的に考えていかなければならないと思っています。しかし、世界の動物がいるわけで、しかも場合によってはその動物の生息地では、そんな動物園のことなんて言っていられないような戦争があったり、悲惨な状況があるわけですから、動物を預かっている以上、その生息地のことも自分たちができることとしてちゃんと真剣に考えていかなければいけないと思います。世界に発信するっていう意味では、日々得た情報、データを論文に書いて世界の人にちゃんと見届けてもらうとか、それから水落さんがおっしゃったように外国人の人がこれだけ来てくれるわけですから、願っても得られないチャンスというふうに捉え、その人たちに日本の動物園は、札幌の円山動物園はこれだけ世界の動物のこともしっかり真剣に、地球規模のことを考えてますよっていうことを、英語でもちょっとインタープリテーションして伝えるサポート、そういうところを目指していくべきじゃないかなと思います。やっぱりもう一度原点に立ち返ると、飼育技術者が一番の代弁者なので、そこの人たちがちゃんとビジョンを理解して、自分たちがこんな大事な役割を果たすべきなんだということを、今一度確認してもらうとこから始まるんじゃないかなと思います。

事務局（加藤園長）　たとえば単純にゾウの話をすると、今、作ってるゾウの動物舎は 30 億かかっているわけです。30 億あれば、もっと福祉にお金が使えるんじゃないのかとい

うことに対して、なぜわれわれはミャンマーのゾウを円山動物園で飼育、展示しなきゃいけないのか、というに対する答えを持たなければいけないと思います。ホッキョクグマも、なぜホッキョクグマを円山動物園で、市の税金を使って飼育展示しているのか。それは、それぞれの動物に対して、そういう理念を持ってコレクションプランを立てないといけないと思うので、やっぱり公立動物園である以上、そこの議論は必ずぶつかるところなんです。でも、最終的にめぐりめぐって、これは市民のためになるんですという結論を持ってやっていかないと、自信を持って動物園を運営していけないと思います。そこの議論を深めたいと思います。

福井氏　円山動物園で言えば、ホッキョクグマの繁殖実績がある。逆に言うと、円山動物園さんがやらなかったら、ホッキョクグマはどこが救うのだというぐらいの自身を持って行動すればいいんじゃないでしょうか。それは世界にアピールできることと思いますね。

水落氏　ゾウがいない動物園というのもつまらないですね。

小菅氏　今の議論で、「なぜ動物園が海外の動物と関わりを持たないといかんのか」という話についてです。私たちがこの日本の中でこの暮らしをずっと続けてきているなかで、今まさにゾウだとかホッキョクグマだとか、それからアフリカの動物たちがいる地域に対して、日本がどれほどの影響を与えてきたかということを本当は多くの日本人が知らなきゃならないと思います。そこで人々とたくさんの軋轢をもって暮らしている野生動物たちを保護していくというのは、その環境からの恵みでわれわれは豊かな暮らしをさせてもらってるんだから、そこのことについて責任を持たなきゃならない、という発想を持たないといけない。でないと、将来本当に地球っていうのは人類によって滅ぼされていくという方向に行ってしまうと思います。それを食いとめるためにも、われわれはそこにさまざまな生き物が暮らしていて、人々も暮らしをしていて、そことの関係があるから今この暮らしができているということを考えないといけない。動物園はそういうことを知る場であると思います。現実を言いますと、動物園ではゾウを保護しているわけです。ゾウはそこでちゃんと繁殖はしているのですが、それを野生に戻すには、ゾウが生息できる森がなければできない。国立公園と言っても皆さんご存じのとおり、そこには人間がたくさん住んでいて、火

を放たれて、そしてちょっとでも出てくれば害獣だといって殺される。そんなところへ保護したゾウを返すことはできない。でもそれを繰り返したら、必ず絶滅へ向かっていくと思います。そのような現実にある個体群を維持する、世界のみんなが維持していく、その役割の一つが札幌市の円山動物園であるということです。だから、円山動物園がミャンマーのゾウの飼育下個体群の一部をお預かりする、という考えでやっている。だから決して生息地のゾウの個体群と切り離しているわけではありません。過去の動物園は切り離して持ってきたのですが、そうではなくて、円山動物園の個体群は、ミャンマーの飼育下個体群の一部であるという考えで連れてきて、繁殖した個体についてはそれを交流する。その交流のときに人も同時に交流をすることになれば、ミャンマーの人にも日本人、もしくは日本の文化、日本の社会というものを学んでもらえるきっかけになるし、それこそ先ほどお話しになっていた海外からの観光客も増加にもつながると思います。また、日本の人たちも、ぜひ円山動物園でミャンマーのゾウを見て、そこで展示されているミャンマーのゾウと人々の暮らしというものを学んで、それで札幌の子どもたちとは言わないけど、多くの人たちがミャンマーへ行って、ぜひミャンマーの動物と人々の暮らしというものをその目で見ていただきたい。そういう交流が続ければ、日本とミャンマーの人々の何かつながりというのが非常に深くなっていくと思うのです。これはゾウで言えばですが、ホッキョクグマもまさにそうなのです。先ほど吉中さんが言ったように、地球温暖化の問題というのは非常に大きくて、ましてやその影響をもろに受けているのがホッキョクグマです。そのホッキョクグマがこういう現状にあるということを、やっぱりホッキョクグマ館でしっかり伝えて、その環境に影響を与えているのが私たちの暮らしなんだと、そういうことを考えてもらうことです。そういう動物園が必要だと思うのです。そういうことをきちっとやっていければ、そういう発信していければ、海外の動物たちを私たちがしっかり飼って展示するという意味が、多くの人たちに理解していただけるのではないかと、私はそう思います。

EnV　ありがとうございました。そろそろ時間です。

次回までには職員のプロジェクトも進むと思います。現構想にも環境教育や種の保存という言葉が挙がっていますが、職員プロジェクトでも話題になると思

います。当検討部会でも、こういう資料を用意してほしい、こういうところを少し説明してほしいなど、議論する上でもう少し詳しく知りたいという要望がありましたら、この後でも構いませんので言ってください。次回の議論のために参考資料を用意させていただきたいと思います。それでは委員長にお返しいたします。

吉中氏　ありがとうございます。皆さん、どうもお疲れさまでした。言い足りないこともいっぱいあるかと思いますけど、一応、時間が 3 時半までってことですので、締めないといけません。次回が 12 月 13 日の 14 時からですが、その間に、説明にあったとおり職員プロジェクトで今回の議論も共有しつつ、そちらでも議論も行われるということです。その進行状況というか、そちらでの議論も次回はわれわれ聞くことができて、さらに目指す方向性等について、さらにまたわれわれのなかで意見交換をしていくということかなと思っております。次回まで、1 カ月ということですけど、その間に、皆さん、もしお気づきになった点とかあれば私のほうでも結構ですし、EnVision さんのほうでも結構ですので、今日言い足りなかったけど、こんなこともっとやるべきだとか、こんなことはけしからんとか、そういうことを言っていただくということにしましょう。

佐藤氏　あんまり言いたくないのですが、今日のまとめとか、職員の皆さんのプロジェクトの内容、概要とかの資料はできれば事前にいただいて、みんな読んできたほうがいいと思います。

吉中氏　そうですね。

事務局（加藤園長）　今日、お話をさせていただいて一つ思ったのが、ちょっと長いとつらいけど 2 時間じゃ物足りないかと思います。やっぱり 14 時から 16 時じゃなくて、17 時ぐらいまでは必要なのかなと思います。あと今あったように、冒頭で資料を配って説明するのは時間が無駄なので、五月雨式になるかもしれないですけど、職員プロジェクトについては、まとまり次第メールでお送りしておくということで、常に情報共有をしながら進めたほうがいいと思いました。

佐藤氏　全部理解できるかどうかはわかりませんけども、ここで見て考えて話すよりは、先に 1 回でも読んだほうがいいかなという気はいたします。

吉中氏　おっしゃるとおりだと思います。皆さん、よろしいですか。今日の議事録も作成されるということですね。

事務局（加藤園長）　はい。

吉中氏　これも案が出来次第、回していただいて、自分の言ったことと違うこと書かれてあればご指摘願います。

事務局（加藤園長）　先生からもお話ありましたけど、その都度気がついたらメールなりでいただけたらと思います。

吉中氏　それでいいと思います。私もそう思いますので、ぜひ忌憚のないご意見を引き続き、みんなで共有しながらいいものを目指していきたいなと思います。

第１回の検討部会は終わりということで、次回またお目にかかるのを楽しみにしております。

（了）